

福井映画界の「聖地」

(片町映画街と橋本工務店)



福井に映画が入ってきたのは明治

30年代後半のことと言われる。日活映画の前身とされる京都の横田商会が月に2、3回福井を訪れ、片町（馬場通り）の芝居小屋である昇平座で上映されていた。昇平座は、明治35年に足羽川より北の商業地域や業務地域の大半が罹災した橋北大火の後、馬場通りに建立された。当時は、映画ではなく「活動写真」と呼ばれていた。

ここから片町界隈は福井映画界の原点といえる場所へ発展していく。大正元年、片町通りの錦上町に寄席として福寿座が開館したが、大正3年に世界館と改称し、常設活動写



真館（映画館）となった。本県初の

常設館が片町通りに登場し、主に日活系の映画を上映していたが、大正6年2月に失火で焼失した。

この世界館の斜め向かいに、劇場の加賀屋座があった。加賀屋座は前述の明治35年の橋北大火で焼失し、翌36年に同地に再建されていた。

世界館焼失後の大正8年、本町通りに新たに福井劇場が全席椅子の本格的な映画館として開館した。これに伴い、加賀屋座は大正11年に改築し、設備が一新され、歌舞や演劇だけでなく様々な催しや映画の興行に利用される劇場になった。また、観客席が3階まであり、県内随一の



戦前の片町映画街

観客席数を誇る劇場となった。

その南隣には、大正11年に松竹館が開館した。この館の名称は幾度かわったが、市民には大衆館が最もよく知られた名称である。名称の変更に伴い、松竹蒲田、日活、大映と映画配給元が変更されている。

その大衆館が加賀屋座の北側に移転した後の昭和14年、この地に福井東宝劇場が東宝映画の封切館として開設された。これにより、片町通りのこの地域には、南から福井東宝劇場、加賀屋座、大衆館と続き、映画街のような様相を呈した。斜め向かいには焼失した本県初の常設館である世界館の跡地にあたり、その跡地に



世界館跡付近から、かつての映画街方面を見る



戦前商工地図「職業別明細図之内・福井市」より（大衆館と東宝劇場の位置が逆に記載されている、右が北、左は桜橋方面）

福井商工会議所が新築され、近代福井に相応しい建物によって一帯が形成され、なかなか壮観であった。

これらの大型建築を手がけたのは、照手下町にあった橋本工務店である。店主は橋本吉郎で、福井建築業組合の副組合長も務めていた。福井市内やその周辺で寺社や学校、会社の事務所など有数の建築物を手がけ、福井商工会議所をはじめ、加賀屋座、大衆館などの劇場、そして本県初の近代的な福井劇場を請け負ったのも彼である。鉄筋コンクリートのビルが普及するまで、彼が建てた建造物は市内で目を引いた。

〔文 奥山秀範（産業史研究家）〕